

山月記

中島敦

青空文庫

隴西ろうさいの李徴りちようは博学才穎さいえい、天宝の末年、若くして名を虎榜こぼうに連ね、ついで江南尉こうなんいに補せられたが、性、狷介けんかい、みずかたの自ら恃むところ頗る厚く、賤吏せんりに甘んずるを潔いさぎよしとしなかつた。いくばくもなく官を退いた後は、故山こざん、かくりやく略りやくに歸臥きがし、人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽ふけつた。下吏となつて長く膝ひざを俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺のこそうとしたのである。しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を逐おうて苦しくなる。李徴は漸ようやく焦躁しょうそうに駆られて来た。この頃からその容貌ようほも峭刻しょうこくとなり、肉落ち骨秀ひいで、眼光いいたずのみ徒らに炯々けいけいとして、曾かつて進士に登第とうだいした頃の豊頰ほうきようの美少年の倂おもかげは、何処どこ

に求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のために遂に節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。曾ての同輩は既に遙か高位に進み、彼が昔、鈍物として齒牙にもかけなかつたその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の儁才李徴の自尊心を如何に傷けたかは、想像に難くない。彼は怏々として楽しまず、狂悖の性は愈々抑え難くなった。一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿つた時、遂に発狂した。或夜半、急に顔色を変えて寢床から起上ると、何か訳の分からぬことを叫びつつそのまま下にとび下りて、闇の中へ駈出した。彼は二度と戻つて来なかつた。附近の山野を搜索しても、何の手

掛りもない。その後李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかつた。

翌年、監察御史、陳郡の袁えんさん という者、勅命を奉じて嶺れ南いなんに使い、途みちに商於しょうおの地に宿つた。次の朝未だ暗い中に出発しようとしたところ、馭吏が言うことに、これから先の道に人ひと

喰虎いどらが出る故ゆえ、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝

が早いから、今少し待たれたが宜よろしいでしょうと。袁は、しかし、供廻りともまわの多勢なのを恃み、馭吏の言葉を斥しりぞけて、出発した。

残月の光をたよりに林中の草地を通つて行つた時、果して一匹の猛虎もうこくさむらが叢むらの中から躍り出た。虎は、あわや袁に躍りかかるかと思つたが、忽たちまち身を翻ひるがえて、元の叢に隠れた。叢の中から人間の

声で「あぶないところだった」と繰返しつぶやくのが聞えた。その声に袁は聞き憶おぼえがあつた。驚懼きょうくの中にも、彼は咄嗟とつさに思ひあつて、叫んだ。「その声は、我が友、李徴子ではないか？」袁は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少かつた李徴にとつては、最も親しい友であつた。温和な袁の性格が、峻峭しゅんしやうな李徴の性情と衝突しなかつたためであろう。

叢の中からは、暫しばらく返辞が無かつた。しのび泣きかと思われる微かすかな声が時々洩もれるばかりである。ややあつて、低い声が答えた。「如何にも自分は隴西の李徴である」と。

袁は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐なつかしげに久きゆう闊かつを叙した。そして、何故なぜ叢から出て来ないのかと問うた。李

徴の聲が答えて言う。自分は今や異類の身となっている。どうして、おめおめと故人ともの前にあさましい姿をさらせようか。かつ又、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭いふけんえんの情を起させるに決つてゐるからだ。しかし、今、図らずも故人に遇あうことを得て、愧赧きたんの念をも忘れる程に懐かしい。どうか、ほんの暫くでいいから、我が醜悪な今の外形を厭いとわず、曾て君の友李徴であつたこの自分と話を交してくれないだろうか。

後で考えれば不思議だつたが、その時、袁は、この超自然の怪異を、実に素直に受容うけいれて、少しも怪もうとしなかつた。彼は部下に命じて行列の進行を停とめ、自分は叢かたわらの傍に立つて、見えざる声と対談した。都の噂うわさ、旧友の消息、袁が現在の地位、それ

に対する李徴の祝辞。青年時代に親しかった者同志の、あの隔てのない語調で、それ等が語られた後、袁は、李徴がどうして今の身となるに至ったかを訊ねた。草中の声は次のように語った。

今から一年程前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊った夜のこ
と、一睡してから、ふと眼を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼
んでいる。声に応じて外へ出て見ると、声は闇の中から頻りに自
分を招く。覚えず、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆
けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自
分は左右の手で地を攫んで走っていた。何か身体中に力が充ち満
ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行った。気が付くと、
手先や肱のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなつてか

ら、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となっていた。自分は初め眼を信じなかった。次に、これは夢に違いないと考えた。

夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあったから。どうしても夢でないと悟らねばならなかった時、自分は茫然ぼうぜんとした。そうして懼おそれた。全く、どん

な事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になったのだろう。分らぬ。全く何事も我々には判わからぬ。理

由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。自分は直すぐに死を想おもうた。しかし、その時、眼の前を一匹の兎うさぎが駈け過ぎるのを

見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消した。再び自分の中の

人間が目を覚ました時、自分の口は兎の血に塗れ、あたりには兎の毛が散らばっていた。これが虎としての最初の経験であった。それ以来今までにどんな所行をし続けて来たか、それは到底語るに忍びない。ただ、一日の中に必ず数時間は、人間の心が還つて来る。そういう時には、曾ての日と同じく、人語も操れば、複雑な思考にも堪え得るし、けいしよ経書の章句を誦そらんずることも出来る。その人間の心で、虎としての己のおのれ残虐ざんぎやくな行のあとを見、己の運命をふりかえる時が、最も情なく、恐しく、憤いきどおろしい。しかし、その、人間にかえる数時間も、日を経るに従って次第に短くなつて行く。今までは、どうして虎などになつたかと怪しんでいたのに、この間ひよいと気が付いて見たら、己おれはどうして以前、人間

だったのかと考えていた。これは恐しいことだ。今少し経てば、己おれの中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋れて消えて了しまうだろう。ちょうど、古い宮殿の礎いしずえが次第に土砂に埋没するように。そうすれば、しまいに己は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い廻り、今日のように途で君と出会っても故人ともと認めることなく、君を裂き喰くろうて何の悔も感じないだろう。一体、獣でも人間でも、もとは何か他ほかのものだったんだろう。初めはそれを憶えているが、次第に忘れて了い、初めから今の形のものでったと思ひ込んでいるのではないか？ いや、そんな事はどうでもいい。己の中の人間の心がすっかり消えて了えば、恐らく、その方が、己はしあわせになれるだろう。なのに、己の中の人間は、

その事を、この上なく恐しく感じているのだ。ああ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思っているだろう！ 己が人間だった記憶のなくなることを。この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。己と同じ身の上に成った者でなければ。ところで、そうだ。己がすっかり人間でなくなつて了う前に、一つ頼んで置きたいことがある。

袁 はじめ一行は、息をのんで、叢そうちゆう 中の声の語る不思議に聞入っていた。声は続けて言う。

他でもない。自分は元来詩人として名を成す積りでいた。しかも、業未いままだ成らざるに、この運命に立至つた。曾て作るころの詩数百篇ぺん、固もとより、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在も最早もはや

判らなくなつていよう。ところで、その中、今も尚記誦なおきしよせるものが数十ある。これを我がために伝録して戴いたきたいのだ。何も、これに仍よつて一人前の詩人面づらをしたいのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生しょう涯がいそれにな執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えないでは、死んでも死に切れないのだ。

袁 は部下に命じ、筆を執つて叢中の声したがに随つて書きとらせた。李徴の声は叢の中から朗々と響いた。長短凡およそ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁 は感嘆しながらも漠ばく然ぜんと次のように感じていた。

成程なるほど、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。

しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠けるところがあるのではないか、と。

旧詩を吐き終った李徴の声は、突然調子を変え、自らを嘲るかごとく如くに言った。

は^はず^かか 羞しいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今

でも、己^{おれ}は、己の詩集が長^{ちようあん}安風流人士の机の上に置かれてい

る様を、夢に見ることがあるのだ。岩窟^{がんくつ}の中に横たわって見る

夢にだよ。嗤^{わら}つてくれ。詩人に成りそこなつて虎になつた哀れな

男を。（袁は昔の青年李徴の自嘲癖^{じちようへき}を思出しながら、哀しく

聞いていた。）そうだ。お笑い草ついでに、今の懐^{おも}を即席の詩に

述べて見ようか。この虎の中に、まだ、曾ての李徴が生きている

しるしに。

袁は又下吏に命じてこれを書きとらせた。その詩に言う。

偶因狂疾成殊類 災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵 当時声跡共相高

我為異物蓬茅下 君已乘 氣勢豪

此夕溪山对明月 不成長嘯但成嗥

時に、残月、光冷^{ひや}やかに、白露は地に滋^{しげ}く、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げていた。人々は最早、事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の薄^{はっこう}倖を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

何故なぜこんな運命になつたか判らぬと、先刻は言つたが、しかし、
 考えように依よれば、思い当ることが全然ないでもない。人間であ
 った時、己おれは努めて人との交まじわりを避けた。人々は己を倨きよごう傲だ、尊
 大だといつた。実は、それが殆ど羞恥心ほとん しゆうちしんに近いものであること
 を、人々は知らなかつた。勿もちろん論、曾ての郷きやうとう党の鬼才といわ
 れた自分に、自尊心が無かつたとは云いわれない。しかし、それは臆お
 病くびような自尊心とでもいふべきものであつた。己は詩によつて名
 を成そうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つ
 て切磋琢磨せつさたくまに努めたりすることをしなかつた。かといつて、又、
 己は俗物の間に伍ごすることも潔いさぎよしとしなかつた。共に、我が臆病
 な自尊心と、尊大な羞恥心との所せ為である。己の珠おのれたまに非あらざること

をおそ懼れるが故に、敢て刻苦して磨みがこうともせず、又、己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々ろくろくとして瓦かわらに伍することも出来なかつた。己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶ふんもんと慙恚ざんいによつて益々ますます己の内なる臆病な自尊心を飼ふとらせる結果になつた。人間は誰でも猛獸使であり、その猛獸に当るのが、各人の性情だという。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獸だつた。虎だつたのだ。これが己を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えて了つたのだ。今思えば、全く、己は、己の有つていた僅わずかばかりの才能を空費して了つた訳だ。人生は何事をも為なさぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと口先ばかりの警句を弄ろうし

ながら、事實は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とが己の凡てだったのだ。己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となつた者が幾らでもいるのだ。虎と成り果てた今、己は漸くそれに気が付いた。それを思うと、己は今も胸を灼かれるような悔を感じる。己には最早人間としての生活は出来ない。

たとえ、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作つたにしても、どうで、どういう手段で発表できよう。まして、己の頭は毎日に虎に近づいて行く。どうすればいいのだ。己の空費された過去は？

己は堪らなくなる。そういう時、己は、向うの山の頂の巖に上り、空谷に向つて吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えた

いのだ。己は昨夕も、彼処あそこで月に向つて咆ほえた。誰かにこの苦しみが分つて貰もらえないかと。しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯ただ、懼おそれ、ひれ伏すばかり。山も樹きも月も露も、一匹の虎が怒り狂つて、哮たけつているとしか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の気持を分つてくれる者はない。ちようど、人間だった頃、己の傷つき易やすい内心を誰も理解してくれなかつたように。己の毛皮の濡ぬれたのは、夜露のためばかりではない。

漸あたりく四辺の暗さが薄らいで来た。木の間を伝つて、何処どこからか、暁ぎようかく角が哀しげに響き始めた。

最早、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、（虎に還らねばならぬ時が）近づいたから、と、李徴の声と言つた。だが、

お別れする前にもう一つ頼みがある。それは我が妻子のことだ。彼等かれらは未だま 略かくりやくにいる。固より、己の運命に就いては知る筈はずがない。君が南から帰ったら、己は既に死んだと彼等に告げて貰えないだろうか。決して今日のことだけは明かさないうで欲しい。厚かましいお願だが、彼等の孤弱を憐あわれんで、今後とも道塗どうとに飢凍とうすることのないように計らつて戴けるならば、自分にとつて、恩倖おんこう、これに過ぎたるは莫ない。

言終つて、叢中から慟哭どうこくの聲が聞えた。袁もまた涙を泛うかべ、欣よろこんで李徴の意に副そいたたい旨むねを答えた。李徴の聲はしかし忽たちまち又先刻の自嘲的な調子もどに戻つて、言つた。

本当は、先まず、この事の方を先にお願いすべきだったのだ、己

が人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己おのれの乏しい詩業の方を気にかけているような男だから、こんな獣に身を墮おとすのだ。

そうして、附つけくわ加えて言うことに、袁が嶺南からの帰途には決してこの途みちを通らないで欲しい、その時には自分が酔っていて故人ともを認めずに襲いかかるかも知れないから。又、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上ったら、此方こちらを振りかえって見て貰いたい。自分は今の姿をもう一度お目に掛けよう。勇に誇ろうとしてではない。我が醜悪な姿を示して、以もつて、再び此処ここを過ぎて自分に会おうとの気持を君に起させない為であると。

袁は叢に向つて、懇ねんごろに別れの言葉を述べ、馬に上った。叢

の中からは、又、堪え得ざるが如き悲泣ひきゆうの声こゑが洩れた。袁も幾度か叢を振返りながら、涙の中に出発した。

一行が丘の上についた時、彼等は、言われた通りに振返つて、先程の林間の草地を眺めた。なが忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。虎は、既に白く光を失つた月を仰いで、二声三声咆哮ほうこうしたかと思うと、又、元の叢に躍り入つて、再びその姿を見なかつた。

青空文庫情報

底本：「李陵・山月記」新潮文庫、新潮社

1969（昭和44）年9月20日発行

入力：平松大樹

校正：林めぐみ

1998年11月12日公開

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

山月記

中島敦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>